隠喩の認知語用論的解釈を目指して

—伝統修辞学の解釈と比較して—

劉　　小　珊

Towards a Cognitive Pragmatic Interpretation of Metaphor Compared with the Traditional Rhetoric Interpretation

LIU Xiaoshan

Abstract

As a rhetoric method, metaphor has been a hot topic in philosophic and linguistic research for a long time. The metaphor study used to be limited in the scope of rhetoric before and it was studied from the viewpoint of rhetoric. It was also looked as a kind of figurative method that existed in vocabulary or sentence and was opposed to the simile. But now the metaphor study has been extended from the "patent" of the rhetoric to a broader range. In this paper, we have made a new explanation about Japanese metaphor from the viewpoint of cognitive pragmatics by a comparative study with the traditional rhetoric on its thinking attribute, its model frame and its cognitive function. We consider that the metaphor is not only a method of using language creatively, but also a method of recognizing, thinking and deciding.

キーワード：隠喩、思惟属性、パターン構造、認知機能、伝統修辞学
Key words: metaphor, thinking attribute, model frame, cognitive function, traditional rhetoric

元本学客員研究員、広東外語外貿大学教授
連絡先：劉　小珊　中国 510420 広東省広州市白雲区白雲大道北2号広東外語外貿大学東語学院
liuxiaoshan217@yahoo.com.cn

1．はじめに

隠喩は修辞手段としてずっと注目され、哲学者や言語学者によって盛んに研究されてきた。これまでの研究は、隠喩を修辞学の範囲に限定し、語彙と語句に存在して明喩と対立するレトリックの手段と見なされていた。これに対し、現在の研究は、隠喩を修辞学より更に広い範囲において考察と研究を行うようになった。その研究成果は意味論・語用論・認知語用論などの分野に見られ、隠喩の研究に新しい活気をもたらした。

哲学の観点から見れば、語用論は一種の方法論であり、コミュニケーションや情報処理に対して説明や解釈の構築を行うものである。語用論には認知的性質があり、認知語用論の研究対象は、語用論的なプロセスまたは場面に関する人間の知識である。この知識は語用論的な経験より抽象化され、人間の長期の知識メカニズムに保存されている（熊学亮 1999：4–8）。その中心となるものは「文脈」である。文脈の要素に対する認知は動的で、認知語用論の重点である。この視点から隠喩について検討することは、隠喩をクリエイティブな言語運用の方法と手段として見るだけでなく、物事を認識し、概念を決定する一種の思惟方法としても見るべきである。したがって、われわれは新しい出発点で思考や探求を行い、隠喩の認知について解釈することが可能である。

近年、言語学者は隠喩と認知語用論との関わりについて注目すべき研究成果を挙げている。小泉保（1997：160）では「鋭い知性によって、隠喩では異なる事物の間に類似性を嗅ぎ出す鮮明な感覚が活動している」と指摘し、陳汝東（2001：459）では「修辞者は比喩的な思考を行うとき、異なる領域の事物に対して認知と比較を行い、また認知の結果を言語の段階に凝縮しなければならない。表現対象に対して一連の感知・分析・加工の作業もその過程に含まれている」と論述している。束定芳（1996）では現代隠喩論の目標、方法と役目を論ずると同時に、隠喩における喩体は話し手や聞き手にとって本体よりも熟知したものと明確に指摘している。また両者の間に反映しあう現象が発生すると、通常は熟知した事物の特徴と仕組みが相対的に馴染みの無い事物に反射されることになる。したがって、隠喩は本体の特徴と構造を認識することに役立ち、認知の機能を持っていると言える。

隠喩の研究に関しては、文体論、修辞学の視点からのものが多く、語用論、特に認知語用論の視点からの研究はまだ少ないようである。隠喩は伝統修辞学の研究においてはどのように解釈され、どのような特徴があるのか、これに対して、認知語用論においてはどのような新しい解釈をするべきか、などは非常に意義ある課題だと筆者は思う。今までの研究を踏まえて、本稿は認知語用論の視点から、伝統修辞学と対照する方法を採用し、日本語を材料にして隠喩の思惟属性、パターン構造、認知機能などの面から、日本語における隠喩について新しい解釈を試みたいと考える。

2．隠喩の伝統修辞学的研究

修辞法における隠喩は伝統修辞学研究の重要な内容で、古代ギリシアのアリストテレスから、人々は修辞の視点から隠喩を検討してきた。言語学者たちは大量な研究を重ね、隠喩の位置づけ、構造、類型、機能に対して詳細に記述し解説してきた。まずそれらと似たような方法で日本語における隠喩現象を分析してみよう。

2.1　隠喩の位置づけと構造

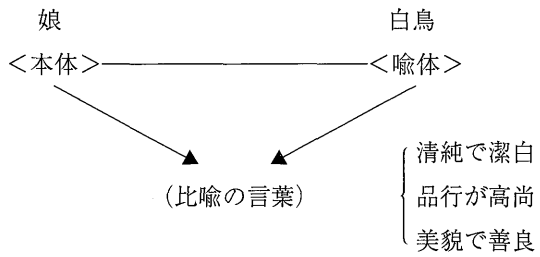
隠喩の伝統的な解説は修辞方法や表現手段に位置づけられ、即ち修辞法の言語段階で分析していた。いわゆるレトリックは喩えを表すものであり、隠喩も同じである。「類似の連想および事物の関係に対する新しい認識により、他の事物を選択して本来の事物の内在的な特徴を描写する。それは言語形象化の重要な手法であり、通常よく使われる修辞法でもある」(張弓1993：133)。即ち甲と乙という二種の異なる事物の相似点により、乙の事物で甲の事物を比喩することである。

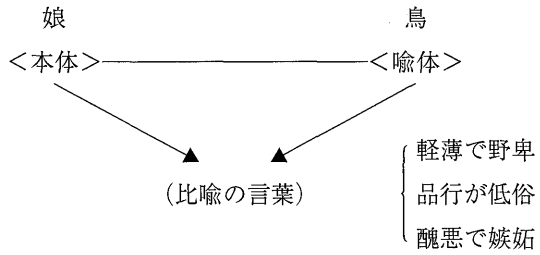
伝統修辞学では一般的に隠喩の仕組みを「喩えられる物」と「喩える物」という二つの面として分析していた。このような分析は発話の意味に対応する客観的な物事とその性質に立脚するものである。それは言語そのものに重点を置き、「本体」と「喩体」という二つの部分に分ける分析法である。二つの概念が相互に作用し、日常的な概念の連想システムを刺激する。喩体のある特徴が本体に投影され、隠喩の意味が形成される。隠喩の意味は両者の相互作用の過程において作り出される。たとえば、

（1）思い知らせてやろう、君の白鳥がただの鳥であることを。(『ロミオとジュリエット』)

話し手と聞き手の経験によると、喩体の「白鳥」は純潔で美しく、品行が高尚な美人を連想させる。即ち「白鳥のように上品で美しい娘」である。これに対して、喩体の「鳥」から連想するのは、軽薄で醜く、品行が低俗であることで、即ち「鳥のように下品で醜い娘」である。この連想が本体に投射し、これによって得た隠喩の意味は次のとおりである。好きになった娘は純潔で美しく上品な白鳥と思っていたが、実際は軽薄で醜く、低俗な鳥だけであるという。

隠喩の基本てきな構造を図で表してみよう。





つまり、隠喩は人々が物事を考える方法であり、思惟の世界を図解する過程で重要な役割を果たしている。隠喩はわれわれのすべての経験の中に存在している。一つの語をもう一つの語に引き換え、或いはただの比喩に限定することは、完全な理解とは言えない。

2.2 隠喩の類型

隠喩の類型は一般的に隠喩の構造的な要素が言語のレベルにおける現れ方によって区分している。小泉保（1997：154）では、これを標識隠喩、正規隠喩、省略隠喩という3種類に分けている。例を挙げて分析してみよう。

（2）人間は、狼のようだ。　　（標識隠喩）
（3）人間は、狼である。　　（正規隠喩）
（4）狼！　　（省略隠喩）

人間と狼の類似点として、凶悪で残忍であり、欲望に満ち、相手を攻撃する特性を持っていることである。標識隠喩の例（2）で、これらの類似の特性は集中的に暗示されている。その中の一つかいくつかの特性が明確に表現されると、明喩になってしまう。正規隠喩の例（3）で、共通特性の標識である「ようだ」がなくなり、人間と狼の異なる特徴、即ち「狼にない人間の特徴」および「人間にない狼の特徴」が無視されてしまう。そうすると、本体の「人間」と喩体の「狼」の間にある共通の特性はかえって強烈に、鮮明に表現される。以下のような場面を想像してみよう。深夜、美しい女の子が一人の男に尾行され、助ける術のない場所に追い込まれた。飛び掛って来ようとする相手に対して、女の子は思い切って「狼！」と叫んだ。この場合、人間と狼の共通の特性は暴行を施そうとする男により、鮮明に現されている。人間自身にあるべき人間性も良知もなくなってしまったことが伝わってくる。

2.3 隠喩の機能

伝統修辞学では隠喩の機能について、一般に以下の４点にまとめられている。

A. 隠喩は記述する物事をさらに形象化し明確にする。

（5）人間は、一本の葦に過ぎない。

人間の共通認識の中に、葦は繊細で脆く、風にたなびく印象がある。人間はか弱い葦のように、複雑で常に変化する社会に生きている。名声や利益、権力や勢力を前に、波に従って流れるときがある。強くて聳え立つか、狂風に吹き飛ばされるかである。この喩えは具体的で生き生きしていて、イメージはとても鮮明である。

B. 隠喩は話し手あるいは作者の立場と感情を表すことができる。

（6）モルソフ夫人は、谷間のゆりのようだ。

バルザックの『谷間のゆり』は、若くて活力に満ちた、スマートな青年であるフィリプが、美しく上品なモルソフ夫人を強烈に愛してしまった。しかし夫人は頑固な主人と病弱な息子を持っている。フイリプは山の谷川にある伯爵夫人の家を頻繁に出入りしたが、夫人はただ貞潔と慈悲に満ちた母性愛で彼の愛情に応えた。フイリプは最後に、やむを得ず無念の心で、別の女の懐に飛び込んだ。バルザックは伯爵夫人を山の谷川に咲く百合に喩えたので、内心に憂慮と悩みが満ちていながら、百合のように清純で美しく、気質が上品で、引きこもって暮らす女性の姿を生き生きと紙面に現している。作者の伯爵夫人への敬服と賛美の気持ちがよく伝わっている。

C. 隠喩は言葉の味を表すことができる。

（7）頭に富士の雪を戴く。

この例は一人の白髪の老人を描いている。もし何の修辞も加えなかったら、味のないものと感じさせるだろう。富士山は日本でよく知られており、頂上の雪は一年中積もっているということで名を馳せている。雄大な富士の雪山で老人の白髪を喩えるのは一番適切であるに違いない。しかも言葉も美しいので、読者の印象を強める効果がある。

D. 隠喩は言葉の感受性を強めることができる。

（8）古人曰く、光陰矢の如し。

他人の言葉を引用するのは、強調を表す表現方法である。たとえば熟語・名言・諺、或いは誰もが熟知する和歌・俳句・詩などで自分の文章を彩ることである。例(8)は古人の名言を引用したので、人々に深い印象を与えると同時に、信頼性を増し、言葉の感受性が強められた。

3．隠喩の認知機能について

伝統修辞学では隠喩の性質、構造および機能に関する解釈は、修辞の実践において大変重要な役割を果たしている。しかし、人々は隠喩の論理への認識は、狭い範囲から広い範囲へ、表層から深層への過程をたどってきた。最新の隠喩理論では、隠喩を言語内部の修辞手段として見るだけでなく、認知語用論の視点から深く考察を行うべきだと認識しはじめた。即ち隠喩を人間の認識の過程と結びつけ、隠喩の認知の属性と価値を見直すべきだという。

3.1　隠喩の思惟属性

認知語用論の視点から隠喩を見直すことを主張する言語学者は、隠喩を一種の修辞方法でありながら、一種の思惟パターン、つまり修辞の過程における思惟パターンと見ている（陳汝東2001)。というのは、隠喩の形成はそれ自体が思惟の性質を持っているからである。人々は比喩を構築するとき、一つの認識の過程も構築の中に含まれている。修辞者は、思惟対象、つまり本体を確定したら、それより直接なイメージ効果を出すため、既存の認知結果と照合し、その中から思惟対象と共通性を持つ対象、つまり喩体を見つけ出すのである。それから、認知比較の結果を記号化し、言葉に変換される。具体的に言えば、言葉を使う最初の過程で、一番先に作り出された語彙は具体的な物事を表すものが多い。人々はこれら具体的な概念から抽象の思惟能力を獲得した後、具体的な物事を表す語彙を借りて抽象の概念を表すのである。こうして修辞学における隠喩の思惟体系が構築されることになる。

人は隠喩を使う場合、二つの異なる事物を表す考えを並べる。この二つの考えが積極的に相互作用しあった結果、隠喩の意味が形成される（Richards 1936)。即ち二つの概念が相互作用して隠喩を形成するのである。隠喩の構造において、無関係のように見える二つの物事がなぜ並べて論じられるかといえば、人間は認識の領域でそれらと似た連想を発したからである。したがって、最終的にこれら二つの物事の融合を利用して解釈と評価を行い、客観的な現実に対する彼らの真の感受性と感情を表す。これが隠喩の認知思惟の属性である。

（9）我ら打ち上げられた花火だから
　　かしこの天へ駆けつけて
　　弾けて鳴って轟いて
　　かしこの闇とたたかはう

例（9）の中に、作者の思惟対象はまず「我ら」であり、即ち本体である。それから「打ち上げられた花火」に当り、即ち喩体である。喩体およびその特徴は作者の認知経験の蓄積であり、その認知の結果は言葉として記号化される。

実際、伝統修辞学では隠喩の位置づけも上述の比喩の過程と結び付けているが、思惟のレベルには上昇していない。この解説は隠喩の成因に触れただけで、言葉が表現される前に存在した思惟の過程を指摘していない。これが伝統修辞学と認知語用論において隠喩を位置づけるときに違ってくるところである。

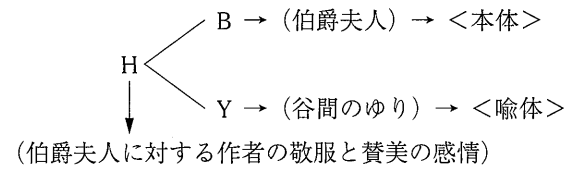
3.2 思惟パターンの構造

隠喩は他の比喩の手法と同様に、独特の思惟過程がある。しかも簡単な思惟過程ではなく、認識の過程において次第に認識の深層に進みながら、形成された一種の思惟パターンである。思惟過程は抽象の心理活動なので、言葉を通じてその軌跡を認知し、具体例を通じて思惟過程における共通性を表すことができる。

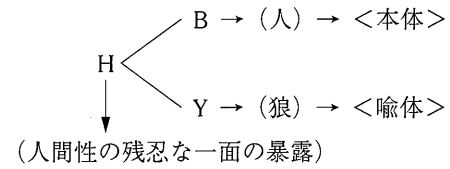
(10) モルソフ夫人は、谷間のゆりのようだ。

この例において、作者は二つの思惟対象がある。一つは本体の「モルソフ夫人」であり、もう一つは喩体の「谷間のゆり」である。作者は最初の思惟対象を認知するときに、「目立たない、清純な、気高い、かぐわしい…」といった特徴を見出し、それから認知の蓄積の中から共通の特徴を持つ「谷間のゆり」を取り出して、その共通性を言語レベルに表した。

作者の表現の趣旨、即ち作者の思想・観点・感情などを比喩の過程の核心として、Hで作者の深層思惟の核心を、更にBとYでそれぞれ二つの思惟対象を表すなら、上例の思惟過程を以下のように表すことができる。



上述の思惟過程は修辞の実践において普遍性を持っているので、一種の思惟パターンともいえる。例文の(2)、(3)、(4)も同様に表すことができる。

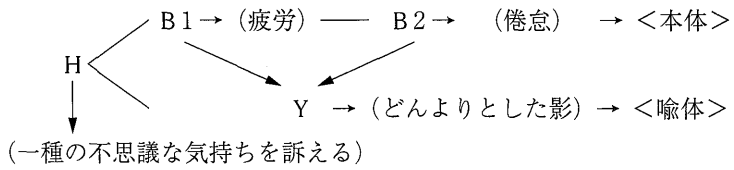


隠喩の思惟パターンにおける三つの思惟支点は、具体的な修辞過程において異なる内実を持っている。言語のレベルにおいて異なる形態を呈しているが、運動の軌跡が一致している。ただし、条件によって、上述の思惟の軌跡に変異の形もある。

(11) 私の頭の中には言いようの無い疲労と倦怠とが、まるで雪雲の空のようなどんより

とした影を落としていた。

この例では、「疲労」と「倦怠」という二つの本体が、「雪雲りの空のようなどんよりとした影」という共通の喩体を有している。作者は「疲労」と「倦怠」を「私の頭に落とされた雪曇の空のようなどんよりとした影」に連想し、自分のぼんやりとした不思議な気持ちを十分に表した。この思惟過程を描こうとしたら、以下のような変異が生じる。



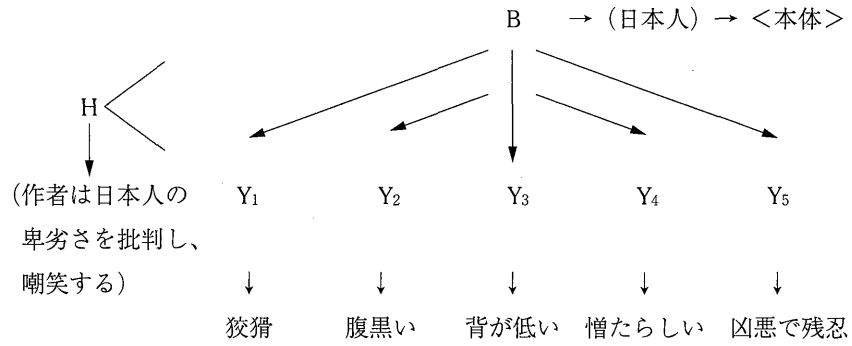
3.3 隠喩の認知機能

隠喩の認知機能は表現の手段だけでなく、重要な思惟手段と認知手段でもある。それを位置づければ、言語領域または修辞領域を価値の参照システムにするべきである。言葉から離れると、隠喩は媒体を失い、認知機能もなくなってしまう。隠喩の認知機能は三つの面で具現している。その一つは、修辞者が思惟対象への認識を深めることに益すること、その二つ目は、言語理解者が認識対象への理解を深めることに益すること、その三は、真理への掲示に益すること、という。

話し手は隠喩の思惟で発話を構築するのは、その思惟の結果を言語の形で聞き手や読者に伝えるためである。しかし、言語と思惟の異質性で、修辞者は表現動機に動かされ、その思惟の結果をより直感的に表現できるよう努力するはずである。

(12) 猿の様な、狐の様な、ももんがの様な、だぼはぜの様な、麦魚の様な、鬼瓦の様な、茶碗のかけらの様な日本人。

この例では、作者は日本人の姿と性格の特徴を読者に知らせようとした。この立体的な姿を線状性の言葉で伝えようとしたら、読者の連想とイメージに委ねるしかない。そうしないと、読者は日本人の姿と性格の特徴を感知することができない。したがって、作者は自分の経験の中から認知対象と相応する立体的なものを探し、日本人の特徴を「猿・狐・ももんが・だぼはぜ・麦魚・鬼瓦・茶碗のかけら」の特徴と結びつける。それによって、読者は認知の蓄積から簡単に作者の言語と対応するものを取り出し、日本人の「狡猾、腹黒い、背が低い、憎たらしい、凶悪で残忍」といったイメージを形成する。この過程で、読者は隠喩によって認知対象のイメージを獲得した。それに、作者も表現しようとするイメージに対して認知を深めた。作者は連想の過程で一つの認知領域から他の認知領域へと跨り、それによって無関係の事柄は思惟の中で関係性が構築され、作者の事柄に対する認識も深まったからである。例（12）はまさにこの認知の思惟過程を言葉で表現したものである。この過程は以下のように表すことができる。



隠喩は一つの総合システムである。使用者は隠喩の思惟で言葉を構築し、思惟の結果を発話の形で聞き手や読者に伝えようとする。したがって、彼らは日常生活における物事の特徴を他のまったく異なる物事と比較し、その中から類似性・相関性・普遍性を見つけ出す。またこれらと類似し相関する物事にそのイメージを転移して隠喩の意味を作り出す。言い換えれば、隠喩の本体と喩体の間に存在する共通の性質が、隠喩の発生する基礎になっている。

A. 隠喩の類似性

隠喩は具体的な物事で抽象的な物事を、熟知の物事でなじみの無い物事を、古い物事で新しい物事を喩えている。抽象的でぼんやりとした無形な概念を鮮明に、具体的に、生き生きと表現しているので、物事を観察し、世界を認識し、生活を描くことに有効な役割を果たしている。

(13) 浅い真珠貝に水を持ったような、気品はあるがはかない感じの湖である。

作者は日本海より遠くない十三湖に来た。目に映った十三湖は波一つ無く、船も一葉無い。寂しくて幅が広く、人々に見捨てられた孤独の水たまりのように見えた。作者は「浅い真珠貝に水を持ったような」「気品があるがはかない感じ」という二つの喩体を使い、目に見えた湖を喩えている。そして、冷たく白く、浮雲と鳥さえ水面に映らない十三湖が生き生きと現れてきた。

隠喩は類似性を基礎にしている。本体と喩体の間に存在する類似性だけを指すのではなく、話し手が新しく創造し、或いはわざと創造した類似性も含まれている。それは客観の事物と人間の経験、人間の思惟と相互に作用し、イメージの投射を生じることである。異なる語彙間の転換と引き換えではなく、人々が隠喩の思惟方式で二つの概念のつながりを認識し、本体に対する喩体の投射作用を理解することである。これは思考交流の過程であり、新しい意味が生まれる過程でもある。その認識の価値は非常に顕著である。

B. 隠喩の相関性

言葉における語彙の確定の意味は、この語彙と他の語彙の関係に由来するもので、隠喩の意味もそれと関係する他の語彙に由来するものである。喩体と本体の間に相互作用の原動力が存在し、話し手は喩体の持つ意味を選び出し、本体の特徴に投射する。それによって本体は相互作用の原動力を得るのである。この作用力は内在的で、互いに対応するものである。隠喩の本体と喩体の間における相互関係は相対的に安定し、互いに映し出したり反映したりする。また、喩体の関係の意味は本体に投射し、本体の意味は喩体に反作用して、隠喩意味の創造と発展を導き出す。

(14) どこの国のテーブルにもある小さな日本。(味の素の広告キャッチフレーズ)

これはコマーシャルのキャッチフレーズである。日本産の味の素を、他の国の食卓にある小さな日本に喩えるのは、適切でユーモアに満ちた、心遣いのある表現といえよう。

(15) 春雨のふるは涙か桜花ちるを惜しまぬ人しなければ。

例 (15) は馬場秋子 (1998) で紹介した和歌である。作者の大伴黒主は綿綿とした春雨で涙を喩え、落ちた桜に対する哀れな気持ちを表した。これは仮借という隠喩の表現法である。

以上の例から、思惟と思惟を表す過程で隠喩がよく使われていることが分かる。語彙の段階に存在するだけではなく、発話の構造にも存在する。話し手は一定の場において直接な表現法をやめ、隠喩の表現法を採用して予期の効果を達成しようとするのである。

C. 隠喩の創造性

隠喩は文化の伝承と発展の媒体であり、文化の積載と伝播の媒体でもある。また、新思想・新概念・新語彙を創造する有力な手段でもある。現代社会では時代の特徴を備えたフレッシュな隠喩が次々と作り出され、われわれの言葉を大いに豊かにしている。その中で、一番特色を持つのは慣用句である。それは日常生活の中で人々と密接に関係する衣食住および動植物を以って、ある特定の意味の語句を連想するものである。形は簡潔だが、意味は新鮮である。

隠喩の慣用句は至るところで見られる。たとえば「歯に衣着せぬ」「足を洗う」「鬼に金棒」「腰が弱い」「青葉に塩」「釈迦に説法」「立板に水」「後の祭り」「雲泥の差」など、枚挙に暇がない。日本人は花の特性で人生の意味を喩えている。これによって多くの慣用語や諺が生まれた。たとえば、「朝顔の花一時」「一花咲かせる」などは人間と物事の繁栄の短さを喩えている。「老いた木に花咲く」「枯れた木に花」は衰えた人と物事が再び蘇え、生命の輝きを放すことを喩えている。「若いうちが花だ」は青春を惜しみ、生命の中の美しいときを把握すべきことを説いている。「花も実もある」「花より団子」「花を持たせる」などは名誉、栄光など外面的な

ものを喩えている。「花に嵐」「高嶺の花」は理想の美しいものを喩えている。「桜は花に顕れる」は桜の素晴らしさで一般の人より優れた才能を礼賛している。「死んで花実が咲くものか」は生命の意味を説いている。「落花意あれども流水情なし」「落花枝にかえらず、破鏡再び照らさず」は愛情や婚姻を示している。日常生活の中で、日本人は花を借りて生命の素晴らしく輝かしいときを喩えることが多い。

新しい隠喩の誕生は一定の変化・発展・進展の過程を経て次第に受け入れられ、認められていく。同時に、もっと広い言語環境に適応するように、元来の隠喩にも新しい意味が生まれてくる。人類は絶えず隠喩を創造しているのは、人類の認知システム自体が隠喩性の構造になっているからである。したがって、よく周りの世界を認識し理解するために、人類は本能的に異なる概念の間に存在する類似点を探求しているのである。

D. 隠喩の普遍性

伝統的な修辞学研究では、隠喩は詩歌と文章にしか用いられず、その機能は修辞だけと見られている。これに対して、現代の言語学者は次のように認識している。つまり「人間はいつも、より具体的な概念を表す述語で抽象的な概念を記述している。われわれの概念システムはほとんど隠喩的なものである。私たちの思惟方式、私たちが経験したすべてのこと、毎日やったすべてのことはほとんど隠喩の問題である」(張艶芳 1995：2)ということである。言語学者は、隠喩は言語別を超えてすべての言語に浸透したものと考えている。文学作品に頻繁に現れるだけでなく、生活の中にもよく見られる。隠喩は人の観察、思考、行為などに影響する日常用語の一部であると考えられている。

戦後、日本国内の政治的出来事は絶えない。各時期にもその時期の政治色を反映する言葉が生まれた。政治家も生きた隠喩で複雑な政治問題を述べている。たとえば、「逆コース」は警察予備隊を組織することを喩え、戦後の憲法修正を叫ぶ政治的な逆流を言っている。「黒い霧」は政治、経済界の人物が職務の権力を利用して私利を謀る黒幕を喩えている。「角抜き」は当時の田中角栄の失脚で発生した政治に対する影響を指している。1991年に大物の金融機関のスキャンダルが明るみにされ、これらの会社の社長と代表取締役が公に謝罪し、悔いの気持ちを表すことによって、「謝長悔長」という言葉が生まれた。「証人甘問」はスキャンダル事件の証人に対する喚問が甘いことを喩え、「一閣千金」は大臣になったら金儲けに走る現象を皮肉している。また、日本人は特有の感性で国際政治情勢の変化を捉え、自らの言語創造力を発揮してその変化を表している。たとえば、「雪解け」は世界の二大政治陣営の緩和を形容し、「紙面ソ禍」は新聞の連続で旧ソ連の災禍を報道することを喩えている。

日常生活においても、生活方式の変化に伴って、大量の新語が生まれた。その中で日常生活の中の物事、或いは特別な人物スタイルを隠喩化する例も多く見られている。たとえば、理想を持たない、やる気の無い若者を「シラケ世代」と言い、群がってモーターに乗って暴れまわる若者を「カミナリ族」と称した。また、「朝シャン族」で毎朝、出勤や通学の前にシャンプーで髪を洗う若者を喩え、「好顔無知」で外見は洒落であるが、頭は空っぽの若者を指す。「クリ

スマスケーキ」の本来の意味はクリスマスの日に食べるケーキを指しているが、12月24日を過ぎたら一文の価値も無いため、女性が24歳を過ぎると、結婚市場で「安売り」するしかないことを喩えている。また、「おーちゃん」は酸素（化学記号O）のように、その存在を感じさせない男性のことを指している。

4．結び

伝統修辞学研究では、隠喩は発話を生きたものにし、言葉の味を引き出すことが目的である。それは大変重要なことであるが、隠喩は考え方などに随時に衣装を着せ、或いは言語を飾って美化するものだけではない。認知語用論では隠喩の価値について違う見方を持っている。認知語用論学者にとって、隠喩は「決して事実を飾る装飾ではない。事実を体験する方式であり、思考や生活の方式である。真理に対する想像的な現れである」（陳汝東 1996：460）。この価値観の論拠は人類学者や言語学者の言葉に対する理解の中から得ることができる。隠喩は特殊の言語方式として、自然に現実を反映し、創造される。隠喩は認知の力を持ち、われわれに世界を認識する一種の新しい方法を提供してくれる。隠喩を通じて別の角度から世界を認識することができる。今では、隠喩の認知機能に対する解説は大いに修辞学の枠組みを超え、今までに無いレベルに達している。

われわれは隠喩を一種の認知現象、一種の思想を表す思惟方式と表現方式として研究している。言語の神秘さを探求し、言語学の研究を推し進め、また言語教育を指導する上でも現実の意義を持っているといえよう。

参考文献

Richards, I. A. (1936) *The Philosophy of Rhetoric*. Oxford University Press

稲垣古彦（1995）「新語・流行語の五十年」『日本語学』(8)明治書院

小泉保（1997）『ジョークとレトリックの語用論』大修館書店

束定芳（1996）「試論現代隠喩学的研究目標、方法和任務」『外国語』(2)上海外国語大学

張　弓（1993）『現代漢語修辞学』河南教育出版社

趙艶芳（1995）「語言的隠喩認知結構――『我們頼以生存的隠喩』評価」『外語教学与研究』(3)北京外国語大学

陳汝東（1993）「比喩――一種思惟模式」『営口師専学報』(2)営口師範専科学校

陳汝東（1996）「言語行為理論的修辞学価値取向」『修辞学習』(9)復旦大学

陳汝東（1999）『社会心理修辞学導論』北京大学出版社

陳汝東（2001）『認知修辞学』広東教育出版社

馬場秋子（1988）『和歌の読み方』岩波書店

（原稿受理　2009年7月23日）